

# 海部川流域から穴喰への古道について

大下 尚\*

**要旨：**海部川流域から穴喰方面に通じる古道には、母川流域から発した居敷越、馬路越、鈴ヶ峰観音道、クレギトウ、ビシャモンノトウがある。これらの古道は藩政期に造られた土佐街道のほか、遍路道、生活道として古来よりこの地域の人々の日々の暮らしとともにあった道だ。

**キーワード：**古道、土佐街道、遍路道、生活道、山道、峠道、塩の道、地藏、観音信仰、毘沙門、文化庁、歴史の道

## 1. はじめに

古来、海部川流域から穴喰方面に通じる古道は、どういうルートだったか。一番楽な道は、海部川下流域で一番西に位置する支流、母川流域から穴喰に向かう道だと想像できる。ただ、起点と終点の取り方でいくつかの古道が存在する。そこで母川流域から発した居敷越、馬路越、鈴ヶ峰観音道、クレギトウ、ビシャモンノトウについて記してみたい。

## 2. 居敷越

この道は穴喰に通ずる道の中で一番古くからあったとされる。往還は浅川から浦上川を遡り、熟田越を経て吉野まで至る。さらに小松越を経て海部川を渡り、右岸の吉田に着く。吉田には鎌倉期に創建された四国最古の禅寺、城満寺がある。さらに西に移動し中山を通り過ぎ、母川を渡り居敷に至る。今と比べてかなり内陸部に寄った道程になっているのは当時、海水面が上昇していたことによるのだろう。

居敷に入ると左の山際に明神谷と呼ばれる小さな谷がある。居敷越はこの谷を遡る。田と山の境を起点として谷を900mほど遡ると広場に鳥居を発見す

る。鳥居から右に流れる小さな瑞々しい谷に沿って参道が伸びている。その奥まったところに轟の滝がある。道沿いには轟明神と彫られた石造物が置かれているが、谷を渡った右手の山裾に祠が祀られている。轟の滝というと海部川上流域の平井カレイ谷の本滝が有名だが、桧木屋、槇木屋、大木屋など、海部川筋には他にも轟の滝がある。

居敷の轟の滝は、江戸後期に書かれた徳島藩の地理誌「阿波志」<sup>1)</sup>によると、次のように記載されている。<sup>2)</sup>



写真1 居敷越 明神谷の轟の滝

「蛇淵、在中山石敷谷、巾三丈長六丈、其深不可測、飛泉注此、有龍祠、稱轟、土人乞雨、側有石蛇

卷，又石涯有馬蹄痕，又穴中有応潮泉」

蛇が淵については、龍が棲むとされ、馬と力比べをした跡として、蛇巻と蹄跡が残っている。ここの神様は金属を嫌うため、滝壺に金物を投げ入れると洪水をおこすと伝えられる。祭日は6月。

さて居敷越に話を戻す。居敷越はその鳥居がある広場から左手の山を登る。ここから距離にして1.7km程度、標高約150mのところに峠がある。



写真2 居敷越 峠の地蔵

平成19年5月に初めて訪れて以来、ここの峠の地蔵さん二基が枯れた大木の下に佇んでいるのを見慣れて来た。峠の見晴らしはそれほど良くない。峠を越えてからは谷に降りたところで道が分かれる。少し上がる道とそのまま谷を降りる道で、居敷越は上側の道と思われる。阿波の峠を歩く会の「阿波の峠歩き」<sup>3)</sup>によると広栄堂という印刷業者の建物裏に降りてくるとある。しかし現況ではその道は印刷業者のあった所のすぐ近くまで通じているものの、よく分からなくなっている。

もう一つの谷を降りてくる道は四国電力の作業道になっている。少し手前の谷の左岸に降りてくる。

なお、居敷越は居敷、中山、櫛川など近隣の集落の方にとっては春の大潮の時期に、磯のものを獲りに行く塩の道でもあった。

峠の石造物

地蔵 大 願主 寅年男 大正六年 五月建

地蔵 小 櫛川村子安堂 法道寄進

### 3. 馬路越

近世、江戸期になると徳島藩藩祖の蜂須賀家政は領内の交通・運輸体系の整備に着手した。主要街道

として次の五つが挙げられる。(1)本道土佐街道、(2)撫養・川北街道、(3)伊予街道、(4)讃岐街道、(5)官道淡路街道だ。

そのうち、土佐街道は徳島を発し、桑野を経て穴喰に至り、土佐に達する街道だ。海陽町に入ってから道筋は、まず浅川から八坂八浜の終点にあたるカリト坂を越え大里に入る。四方原を経由し、多良の「さいもんじの渡し」から海部川を高園に渡る。医福寺の前を通り過ぎ母川を渡り、馬路から山を越え那佐に降りた。馬路越の往還は居敷越より少し下流側に寄っている。

#### 1) 馬路越新道

馬路越には新道と旧道がある。一般的に知られているのは新道で、徳島県教育委員会の「阿波遍路道東寺道」<sup>4)</sup>によると、明治14年(1881)に海部郡内で開始された土佐街道の改修工事によるものと考えられている。現在、歩き遍路が使っているのがこの新道だ。まず新道について書いてみたい。

高園から愛宕山の南側に回る町道を馬路橋で母川を渡る。さらに進み、左手の小川を渡る地点が取り合いだ。地元の土地家屋調査士の方がご好意で看板を立て、道を整備してくださっている。やがて傾斜が急になると石畳で整備された道となり、切り通しになっている峠の石積の壁に地蔵が置かれている。



写真3 馬路越 那佐の展望

ここに初めて行ったのは平成20年4月ころで峠の広場は草が生え放題だったのだが、平成21年2月には先ほどの土地家屋調査士の方が綺麗に草を刈り取ってくださり、那佐の海を見下ろす絶景を見ることが



ができる。取合からの距離にして約800m, 人にもよるが15~20分で到達できるだろう。標高104mの峠から見ると那佐湾に浮かぶ二子島の展望は素晴らしい。その後一時期放置されたが、令和元年の年末から翌年の正月にかけて再び草刈りが行われた。ここから那佐に降るが、上りと比べ傾斜は少し急なので歩くときは注意をした方がよい。

降りてくる地点は地元の建設会社、平岡産業の倉庫の右手になり、ここで国道55号に合流する。海陽町教育委員会の建てた木の表示がある。那佐湾の奥、二子島を眼前に眺め、右に行くと宍喰方面に向かい、大那佐の集落がある。町道取合いから、国道55号に合流するまで、約1.7kmの道のりである。

馬路越新道の特色は工法に今までにないものが見られる。これについては「3) 水に対する対策」で述べたい。

## 2) 馬路越旧道

馬路越の旧道は大那佐の住民からは殿様道と呼ばれている。例の土地家屋調査士が父親から聞いた話によると、圃場整備する前は、馬路越の道は馬路の田の真ん中を通過していたという。

旧道の取合いは新道の取合いを通過し、馬路の町道が舗装されている地点の一番奥まで行く。そこからは谷に沿って山道が出ている。巾五尺、約150cmと広く、かなり重要な道である。途中、出水で道が不明瞭になっているところもあるが、峠に出る直前で復活する。新道と比べ、水の影響を受けていることがわかる。峠には石造物はおかれていない。峠から降りる道は右手に展開している。所々、状態が悪いところもある。国道近くまで行くことができるが、途中で不明になっている。

## 3) 水に対する対策

馬路越の旧道は水の影響を受け、途中、破損しているが、新道はほぼ完全な形で残されている。これは新道は比較的新しいため、随所に出水に対する対策が施されている為だと思う。

具体的には、道を横切るかたちで水路が設けられていることが大きい。この水路は石造で山側からの出水を谷側に逃がす目的で造られ、馬路側の随所に設けられている。旧道で破損している箇所が那佐側でなく馬路側であることから、新道ではこの水路が

馬路側にふんだんに造られている。

さらに、新道で谷に沿った道が切り返しになるところに石造の堰が設けられている。これは上流の谷からの雨水の流れる方向を道からそらし、道が出水の影響を受けないようにするための工夫だろう。



写真4 馬路越 石堰

また、石畳や石橋が設けられていることもその対策と考えていいと思う。

こうしたことが、新道がほぼ完全な形で残されている原因だと思われる。

## 4. 鈴ヶ峰観音道

この道は櫛川近辺の方が宍喰八坂神社の祇園祭に行く時も使ったという。居敷よりもさらに母川の上流に位置する集落、櫛川に注ぐ西敷川を遡る。尾根を周り宍喰に通ずる古道は6kmに及び、本項で紹介する古道の中でも一番距離がある。



写真5 鈴ヶ峰観音道 西敷川祠

西敷川を遡ると道端に静かな佇まいの祠が置かれている。この左脇から山に登る道がある。祠から約2km少々地点のシイの巨木の下に地蔵が置かれている。そこから200mくらいが後で述べるクレギトウだ。そのまま尾根を進み観音信仰のある鈴ヶ峰

に達する。途中にいくつか丁石が置かれている。

ちょうど中間地点のあたりに岩が大量に露出し、小山のようになっているところがある。その山の上にはウバメガシの大木が一本、目印のように生えている。その木にもたれかかるように、細長い岩が、三つに分かれて置かれている。その様は墓標のようにも思えるが、山に詳しい友人によるとどうやら神を祀っているのだらうと、いうことだった。



写真6 鈴ヶ峰山頂からの展望

標高370mくらいの鈴ヶ峰越を跨ぐと、四国のみち遊歩道になっている。左に進路を取ると395mの三角点の置かれている山頂に達する。展望所になっており、東は那佐半島と大里平野、南は穴喰の町と水床湾の美しい入江を目にする。右に降りると廃寺となった観音堂がある。寺には戦後間もない頃まで人が住んでいたと穴喰の喫茶店で聞いた。穴喰町誌<sup>5)</sup>、海部郡誌<sup>6)</sup>にその写真が掲載されており、往時の様子をすることができる。

鈴ヶ峰は展望所と寺から北西の位置にある裏山の二つのピークがあるが、山頂は東の方だ。名前の由来は宝珠のように丸みを帯びた山容になっていることによる。

峠から300mくらい降るとヤッコソウがシイの木の近くに自生している。国の天然記念物に指定されている植物で11月初旬が見頃だ。

下り道は四国の道になっており、重機で押してつくったため、少し人工の道の雰囲気があるが、所々にある奇木、古木がそれを補っており、風情を保っている。また、古道も道すがら顔を出すので、それを楽しむのも良い。穴喰中学校の近くに降りてくるが、そこに石仏が置かれている。

山頂から穴喰に降りる時、ある切り返しの地点に

来ると、このまままっすぐ行くと日比原方面に向かうのではないかと思わせる雰囲気のところがある。つまり鈴ヶ峰の参道は他にもあったのではないかということだ。太龍寺では、加茂、水井、細野、北地、中山、阿瀬比、黒河からの登り道がある。津峯でも、見能林、長生、内原から登り路がある。通常、麓のそれぞれの集落の者がわざわざ他所の集落まで行ってから登るという回りくどいことはしないものだ。鈴ヶ峰についても日比原の方にお聞きしたら確かにあったらしい。おそらく、馳馬をはじめ日比原から上流の集落はここから登ったのだらう。

初めて足を踏み入れたのは平成20年3月だが鈴ヶ峰までは到達せず引き返した。鈴ヶ峰まで踏査したのは平成22年4月で、以来平成24年11月、平成26年2月、そして令和元年12月と計4回走破している。

## 5. クレギトウ

鈴ヶ峰観音道の途中、シイの木の下に地蔵が置かれた地点から200m南の地点が峠であるクレギトウなのだが、目印がないため非常に分かりにくい。ここから山を西に下る細い道があり、旧穴喰町小谷のクレギ谷に降りてくるのでこの名がある。クレギ谷は3軒の家がある。この谷に林道が開削され、すでに降り道は分かりにくい状態だ。平成20年3月に行った時はなんとか認識できたのだが、平成29年3月に再び訪れたが、分かりにくくなってしまった。

## 6. ビシャモンノトウ

櫛川の一歩奥、母川の最上流域から西に向かい、旧穴喰町小谷字北河内に降りてくる。こちらは広岡川の上流域で、穴喰川水系にあたる。平成25年12月から津波迂回ルートとして県道芥附海部線を建設中



写真7 ビシャモンノトウ遠景



の区間だ。かつて海部川水系の櫛川と宍喰川水系の北河内は通婚圏として、自動車が普及する前は深い交流があった。

峠は杉が生え見晴らしは良くない。地藏が一基置かれている。



写真8 北河内毘沙門堂

北河内側に降りてきた山際には毘沙門堂が建てられている。峠の名前はここから取っているのだろう。堂宇の鰐口には応永の銘が刻まれている。応永は足利将軍3代義満、4代義持、5代義隆の時期にあたり、30年間に渡る(1394～1428)。この時期は海部刀が数多く造られた時期であり、海部川流域が隆盛を極めた頃だ。そして海部刀の刀鍛冶の本拠地は山向こうの笹無谷にある。ここ北河内にも鍛冶屋谷という地名が残されており、刀鍛冶が住んでいたという。毘沙門天は武神であるから刀鍛冶の信仰の対象となっていてはなんら不思議ではない。

北河内はかつて小谷で一番大きな集落だったが、平成になって一番先に廃村となってしまった。

## 7. 結語

令和元年11月20日、文化庁により歴史の道が追加

され、馬路峠の名がその中にあった。徳島県では阿波遍路道として数多くの古道が採用された。馬路峠というのは、ここで馬路越と表記した峠道のことだ。

藩政期に造られた土佐街道はルートが決まっている。これに対し、遍路道は決まったものでなくいくつもルートがあるものだ。したがって土佐街道を遍路道として使うこともある。他にも生活道が使われることもあり、かなり多様性がある。ここでとりあげた古道はいずれも土佐街道、遍路道、生活道として古来より日々の暮らしとともにあった道だ。



国土地理院地図(電子国土Web)より作成

## 参考文献・註

- 1) 佐野山陰編(1815)『阿波志卷十二』阿波藩
- 2) 海部町教育委員会編(1971)『海部町史』海部町
- 3) 徳島の峠を歩く会編(2001)『阿波の峠歩きふるさとの峠50選』阿波の峠を歩く会
- 4) 徳島県・徳島県教育委員会編(2020)「阿波遍路道：東寺道(八坂八浜・馬路峠・宍喰峠牟岐町牟岐浦から海陽町宍喰浦までの遍路道)：調査報告書」徳島県
- 5) 宍喰町教育委員会編(1986)『宍喰町誌上巻』宍喰町宍喰町教育委員会
- 6) 海部郡誌刊行会編(1927)『海部郡誌』海部郡誌刊行会

The old roads from Kaifugawa river basin to Shishikui

OOSHITA Takashi

Proceedings of Awagakkai, No.63(2021), pp.139-143.

